

小田原駅長の殉職を称える碑文に菊池寛の心情を探る。

老年学士曜随想第 12 号 05 年 4 月 30 日

季節が急速に移り変わっていきます。先週まで咲き誇っていた八重桜はすでになく、春最後の花と言われるツツジが色とりどりの美しさを見せています。ツツジが過ぎると季節は夏に移ります。

この美しい季節の移り変わりを感じ取ることもできず、悲しい思いに苦しむ尼崎での電車事故の多くのご家族がおられることを、悲しく思います。西日本旅客鉄道株式会社のホームページには、「JR 宝塚線塚口～尼崎駅間における脱線事故についてのお詫び」が載っていますが、通り一遍のお詫びの文でしかありません。もちろんこの事故の関係者が読んで慰められるものではありません。この文を読んでいて、私はふとある碑文を思い出しました。

小田原駅を海側へ出て、すぐ右横に「松本駅長殉難碑」がひっそりと立っています。箱根への入り口にもあたるこの駅ですし、旅行者も多く通る小田原城址に至る道に面したこの碑ですが、立ち止まって読む人はあまりいないようです。私はそれを読んで感銘を受けましたので、手帳に書き写しておきました。その文をご紹介します。

松本駅長殉難碑

鉄道大臣八田嘉明筆

鉄道旅行の利便と幸福とを受くる方はどうぞここに一度は足を停めて鉄道旅行の安全のためにささげられた犠牲の一人松本駅長の事を考へて下さい。

昭和 16 年 7 月 22 日暴風雨の夜松本駅長は当小田原駅付近の支障現場を再三視察中烈風豪雨の暗夜とて不幸足を取られて陸橋下に墜落重傷を負ひ遂に再起されなかったのです。それは戦場の死に見るような華やかさはありませんが、職務に忠実なるわが国鉄職員の魂がはしなくも火花を散らした美しくも貴い死だと云はねばなりません。

この貴い殉職は 38 万鉄道職員の胸に、いな常に鉄道を利用する一般国民の胸にも永く永く伝へねばならない事だと思ひます。

昭和 17 年 7 月

菊池 寛

菊池寛が綴ったこの一文は、戦争中の鉄道輸送の安全を確保するために不慮の死を遂げた松本駅長を悼んで書かれたものです。他方今回の事故は、私鉄王国の関西で、阪急電車との競争のために遅れることが許されなかった運転手が、安全よりも定時運転を重んじたために起こしたのではないかと見られています。鉄道輸送の環境が大きく変わったことを感じさせます。

実は私はこの碑をもう一つ別の目でも見ているのです。それはこの碑が作られた時期です。昭和 17 年 7 月といえば実はミッドウエー海戦で日本海軍がその主力である 4 隻の空母を一举に失うという決定的敗北を喫した直後ですが、この事実は正しく国民に発表されていませんでした。ですから、国民は緒戦の勝利に酔っていた頃です。日本の軍隊の強さに国民の称賛が集まっていたその時に、この碑が建立されたのです。

菊池寛という文豪がこの戦争に対してどのような姿勢をとったのか、私は詳らかではありませんが、この碑文から読み取れるのは当時の世の中の価値観に対して抵抗する姿勢です。軍人こそ国のために最大の貢献をしていると思われていた時代に、そして太平洋戦争

の初期で、連戦連勝が続き、日本の軍隊の強さが国民に強く意識されていたこの時期に、「戦場の死に見るような華やかさはありませんが」と言いながらも、この民間人の死を戦場の死に劣らない貴いものとして称えているのです。

戦争中われわれはよく明治天皇の御製を使って、銃後の守りも戦場と同じ価値があることを教えられました。その御製は「国を思う 道に二つは なかりけり 戦の庭に 立つも立たぬも」です。このように言われてはいても、第一線で戦う兵士の価値が高かったのです。それに対するプロテストの姿勢をこの菊池寛の碑文から感じます。さらに言えば、よくこんな碑がその時代に、鉄道大臣も手を貸して建立されたものだとも思います。

この碑が作られた2年半後には、当時菊池寛も予想していなかったと思われる事態が出現します。日本国内全体が戦場になってしまったのです。サイパン島が占領され、そこに築かれた飛行場からB29が大挙日本本土を空襲できる態勢が整うと、日本は連日連夜空襲を受けることになりました。そして戦略爆撃といわれる空襲の目標も、軍事施設や軍事工場、輸送施設から国民そのものを大量殺戮することに向けられました。

その頃には戦場での死にも華やかさはなくなりましたが、悲惨でむごたらしい死が国民全体を襲いました。その代表である1945年3月10日の東京大空襲では、一夜で10万人もの市民が殺されました。原爆にも匹敵する大量殺戮です。戦争が軍事集団同士の戦いではなく、国民を殺し合う戦いに変質していきました。

さきの碑文を書いた時、菊池寛には恐らく日本国内全体が戦場になるという予感はなかったでしょう。そして人々が空襲の下で逃げまどった時代からもう60年。そんな時代を経験した人々も日本からどんどん減っていきます。その時代を生きた一人として、私はあなりの寂しさを感じます。

東京大空襲を含む対日戦略爆撃を指揮したカーチス・ルメイ少将に対し、1964年に航空自衛隊の育成に貢献したとの理由で勲一等旭日章が授与されていることをご存じでしょうか。JR西日本社長の垣内剛氏も、やがては鉄道事業に対する貢献で受勲するのでは

敗戦までの日本とはどんな国だったのか。私の体験から語る。

老年学士曜随想第22号05年10月29日

今年は戦後60年ということで、いろいろな催しがあります。映画のセットとして戦艦大和が作られたり、劇団四季が「語り継ぐ日本の歴史」と題して、「李香蘭」「異国の丘」「南十字星」という3本のミュージカルを上演しているなど、芸術の分野でも戦後60年は華やかです。

このメーリングリストを読んで下さる方々の中で、今から60年以上前の日本に生活していた方はごく少数派でしょう。私も戦後60年を記念して、60年以上前の日本の一端を皆さんにご紹介しようと思います。94歳で今年文化勲章を授与される日野原重明さんも、戦争を経験したものはその経験を今の人びとに伝えるべきである、とっています。今回は、戦争時代の日本を生きていた世代として、その語り継ぐべき責任を少しでも果たしたいと思います。

昨日の朝日新聞の投書欄に「天皇制論議は高齢者の義務」と題した79歳の方からの投書が載っていました。その中に小学校での祝祭日の行事が描写してありました。「当日は全員が講堂に集合します。校長は壇上正面の奉安殿の扉を開き、天皇・皇后のご真影（写真）に全員で拝礼します。ついで教育勅語を朗読。全員、直立不動で敬聴します。君が代斉唱が行われ、最後は校長の訓辞ですが、その内容は『わが国は現人神（あらひとがみ）の天皇の統率したもう神国である』というもので、この思想は教育の根幹でした。こうして忠君愛国の精神を植え付けられて育った軍国少年の私たちは、聖戦の名のもとに戦場に送られました。」

「わが国は現人神（あらひとがみ）の天皇の統率したもう神国である」わけですが、その根拠はるか昔の神代の時代の「天孫降臨」にあります。ですから小学校における古代歴史の教育では、「天孫降臨」が一つの大きな教育のポイントになります。

「天孫降臨」とは天照大神が皇孫ニニギノミコトを高天原から虹のかけ橋を渡って九州の高千穂峰に遣わしたことをいいます。その時に天照大神は神勅を与えています。それは私の記憶では次のようなものです。

「豊葦原の瑞穂の国（つまり日本のこと）は、これわが子孫の君たるべき国なり。汝皇孫ゆきて治めよ。あまつ御国の栄えまさんこと天地（あめつち）と共に極まりなかるべし」

この神勅は教科書では枠に入れられて、よく目立つように書かれていたと思います。そしてこれが天皇家が日本を統治する根拠です。

このような神話を歴史として教育したのです。神話と史実がごちゃ混ぜになった歴史が教えられたのです。そのごちゃ混ぜに気付かない私は、天上にあったという高天原のことが気になっていました。それで小学5年生の頃、教室で先生に一つの質問をしました。「先生、高天原のことはその後教科書に何も書かれていませんが、どうなったのでしょうか。」

この質問を受けて先生はしばらく沈黙しておられました。そして「その後のことはよく分かりません。」と言葉少なに答えられました。今にして思えば、これはとても賢明な答え方でした。もし自分の良心に忠実に「これは神話ですから、史実ではありません。高天原は天上にあったのではなくて、おそらく日本国内のどこか、あるいは外国にあったのでしょうか。」とでも答えたら、大変なことになります。生徒にとってはとても面白い話ですから、家に帰って「先生は今日こんなこと言ったよ」と親に言うでしょう。そうすれば、

その先生は「とんでもない危険思想を持った非国民教師」ととられるでしょう。学校に伝われば、直ちに失職したかもしれません。そればかりか、「非国民」の要注意人物として特高警察が監視をしたかも知れません。このように神話と史実が混ざった歴史教育が行われ、大人は神話と知りつつも、そのことを口には出せない時代でした。

(注) アメリカのルイジアナ州では1987年まで、進化論を教える場合には、同時に聖書の創世記に書かれている天地創造神話を教えることが法律で義務付けられていたそうですから、神話の扱いは簡単なものではないのかも知れません。しかし日本の場合は神話を史実として教えていたのです。

私の身近に起きた「本当のことを話せない」というもう一つの例を挙げてみましょう。1944年(昭和19年)私と兄は朝鮮の平壤の中学校にいて、私は2年生、兄は5年生でした。この年の秋にはアメリカ軍は反撃の勢いをさらに強め、フィリピンのルソン島に上陸してきました。日本軍はほとんど戦うことなく、直ちに山中に退却しました。そしてこの山中で武器弾薬は勿論、食糧もなく、多くの餓死者を出す悲惨な戦いを演ずることになるのです。そのような実状はわれわれに伝わりませんが、首都マニラを放棄して、山の中に退却(当時は「退却」ではなく「転進」といいました)したことは大本営が発表する戦況から分かります。このような背景の下で、この事件が起きました。

軍事教練(兵隊並に戦うための訓練が中学には教科としてありました)の時間、退役軍人の教官は「現在の戦争では飛行機や機械化部隊が活躍しているように見えるが、最後に勝敗を決するのは歩兵による白兵戦(敵との近接戦)である」と日露戦争の教訓から得た日本陸軍のドグマを兄たちに教えました。黙っていればよかったのですが、兄は次のような質問をしてしまったのです。

「先生はそう言われますが、フィリピン戦線では、山下兵団は敵と白兵戦を交える前に、ルソン島の山間部へ撤退しているように見えます。先生のおっしゃることは実際には当てはまらないのではありませんか。」

この質問を教練の教官は大問題と考えました。その理由は、まず先生の教えに反論したことです。これだけなら生意気な学生ということで、殴られるくらいで済んだでしょう。しかし兄の場合、反論した事柄がまずかったのです。帝国陸軍が日露戦争の勝利から得た教訓として、金科玉条と考えている基本思想に反論したのです。こうなると生意気な奴ということでは済みません。教練の教官がこれを危険思想だと考えたのは、当時の日本では当然のことでした。しかも日本軍が敗退していると見ているのは、許せない非国民です。国民の誰の目にも敗退を続けている日本軍でしたが、いずれ神風が吹き、戦局は一転する、と信じ込まされていまして、負けているとは決して口にしてはならないことでした。

直ちに受け持ちの先生、学校長までを巻き込んだ大事件になりました。父は単身赴任で家になかったため、その夜母が兄を連れて、受け持ちの先生、教練の教官、校長、それぞれの家を訪問し、謝りに謝りました。幸いなことに、それだけでこの事件は納まりました。普段から兄は優秀な学生とされていたことが、幸いしたのでしょう。

小泉首相の靖国神社参拝に中韓が反発することに関して、「外国からとやかく言われることではない」という意見を持つ人びとが少なくないようです。私は中韓から言われる前に、われわれとしてあの時代の日本をどのように見るのか、全てを容認するのか、何を容

認しないのか、はっきりした考えを持つ必要があると思います。

終戦までの日本 私は特攻隊に今でも涙する。

老年学士曜随想第23号05年11月5日

今から60年前の終戦まで、私はほぼ15年間生きていました。その中で決して忘れ得ないことの一つは、特攻隊のことです。今回はそのことを書きたいと思います。

「身を鴻毛の軽きにおき（自分の身体、生命は羽毛のように軽いものと考えて）、天皇陛下の御ために捧げ奉る」ことが日本男児の生き方であると教えられてきた軍国少年の私にとって、1944年10月から始まった特攻隊の攻撃は、まさにこの教えを具現化した理想の生き方、そして死に方でした。従って、「お前は特攻隊に参加して死ぬことができるか」と自問し、特攻隊に参加することを自分の人生の目標としようとする努力を積み重ねた、そんな時期が終戦までの何ヶ月か続きました。

特攻隊は私個人の心の中で自分の生きる規範となっただけではなく、日本国民全体を律する一つの規範ともなっていたと思います。「そんなことをして、自分の命を捨てて戦っておられる特攻隊の方々に対して申し訳ないと思わないのか」というような言い方で、社会全体の規範としての役割も特攻隊は果たしました。

私は特攻隊へ近づく具体的な行動として、当時新設された海軍兵学校のジュニア版（正式の名称は覚えていませんが、兵学校が中学の4年生と5年生が受験できたのに対して、中学の2年生が受験できるもの）に受験しようと思いました。父親は「萬治は身体が頑健とは言えないから、体力を要する海軍兵学校ではなく、技術を重視する海軍機関学校にしたら」とアドバイスしてくれ（この方が死亡率が低いというのが父の真意だったと思います）、私は新設された海軍機関学校のジュニア版の受験手続きをしました。

不思議なことにこの受験は書類選考で落第しました。不思議だというのは、私より成績の低い生徒が書類選考で合格したからです。この理由は想像できないものではありませんでした。前回紹介した兄が起こした事件で、私は非国民の弟というレッテルを貼られていたので、内申書が悪く書かれていたのでしょう。このようにして私は軍隊に入ることなく終戦を迎えました。

特攻隊を考えると、私はいつも死んでいく若者たちが何を考えていたのか、と考えます。それを推し量る材料として、多くの遺書が残されています。しかし遺書から本当の彼らの気持ちが分かるのか。「ほたる」という特攻隊をテーマとした映画があります。この中で朝鮮人の金山少尉が言う「検閲を受ける遺書に自分の本心が書けるか」という台詞があります。残された多くの遺書は検閲を受けた遺書です。

「新しい歴史教科書」には二つの特攻隊員の遺書が掲載されています。そして「戦争中の人々の気持ちを、上の特攻隊員の遺書や当時の回想録などを読んで考えてみよう。」と書かれています。この二つの遺書は共に検閲を受けた遺書だと思います。検閲を受けた遺書を読んでも、そこから得られるものは、当時の規範とされた考え方であって、人々の本当の考えではありません。

私にはこんな経験があります。大学で教えていた数年前、10人くらいの少人数による文章表現法という授業がありました。その授業で私は特攻隊員の3つの遺書を学生に聞かせるために読んだことがあります。最初の二つは「新しい歴史教科書」に載ったものです。最初のもは19歳で戦死した宮崎勝の遺書で、小さい妹向けにカタカナで書いてあります。次は23歳の緒方裏の遺詠です。余り長くありませんから、これをご紹介します。

出撃に際して
懐かしの町 懐かしの人
今われすべてを捨てて
国家の安危に赴かんとす
悠久の大義に生きんとし
今吾れここに突撃を開始す
魂ハク 国に帰り
身は桜花のごとく散らんも
悠久に護国の鬼と化さん
いざさらば
われは栄えある山桜
母の御もとに帰り咲かなむ

これを大きな声で読んでいて感じたことは、実に調子よく読めるなあ、うまく作られているなあ、ということでした。もう一度読みたくなるほどでした（ハクの漢字が出ないので仮名にしました。白偏に鬼という字です。魂という意味です。）。

そしてその次に「きけわだつみのこえ」に載っている上原良司の所感を読み始めました。「栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄これに過ぐるものなきを痛感致しております。思えば長き学生時代を通じて得た信念とも申すべき理論万能の道理から考えた場合、これはあるいは、自由主義者といわれるかも知れませんが、自由の勝利は明白な事だと思えます。人間の本性たる自由を滅ぼす事は絶対に出来なく、例え、それが抑えられているごとく見えても、底においては常に闘いつつ最後には必ず勝つという事は、彼のイタリアのクロッチェも言っているごとく真理であると思えます。権力主義全体主義の国家は一時的に隆盛であろうとも、必ずや最後には敗れる事は明白な事実です。われわれはその真理を、今次世界大戦の枢軸国家、において見る事が出来ると思えます。（以下略）」

このように読んできた時、私は突然嗚咽し始め、後を読めなくなりました。学生には後は各自で読んでくれ、といい、私が読むのは止めました。この所感の終わりの方には、「明日は自由主義者が一人この世から去っていきます。彼の後ろ姿は淋しいのですが、心中満足で一杯です。」という文があります。こんなものを私が大きな声で読めるはずがありません。上原良司はこの所感を当時特攻基地に来ていた毎日新聞の記者高木俊朗に直接渡しましたので、検閲は受けていません。

数年前に出版された城山三郎の「指揮官たちの特攻」では、料亭の柱に残された無数の刀疵に、特攻隊の若者の心情を語らせています。この刀疵がどんなものであったのかを、私は城山三郎自身が出演したNHKのテレビ番組で見ることができました。あの刀疵が、いろいろな思いの中で、死んでいくことだけは逃れ得ない、彼らの心情を雄弁に物語っているように思います。

自分が死んでいく意味をとにかく見つけだし、自分を納得させようとしたのです。「天皇陛下の御ために」という当時の大義名分も、ここでは実はほとんど役立たなかったのではないかと思います。私は特攻隊のことを思う時、苦しみながら死んでいった人たちの心情に、今でも涙する思いがします。

そして地球のこちら側には自分が死ぬ意味を見つけるために苦しんでいた若者がいた時、地球の向こう側のアウシュビッツには、どんな苦難の中でも人間には生きる意味があるのだと悟っていたフランクがいたというこの対照を、大事に考えたいと思います。

終戦までの日本はどんな国だったのか 三笠宮寛仁氏の歴史観に驚く。

老年学土曜随想第24号 05年11月12日

前々回の老年学土曜随想第22号で、60年以上前には日本の学校では神話を史実として教えていた、と書きました。戦後60年の今日、もうそんな歴史観を持っている人はいないだろう、と私は思っていました。ところがそうではなかったのです。「万世一系の天皇」とか「紀元2665年」とか「民草」とかという、60年前に消えて無くなっていたはずのものを今も信じている（あるいは信じているかのように振る舞っている）人がいることを最近知りました。それは三笠宮寛仁氏です。その話に入る前に、昔の歴史教育について、もう少し述べさせて下さい。

私の家には30年ほど前に出版された和歌森太郎監修秋山慎三著「やさしい日本の歴史」という4巻で構成された小学生向けの歴史の本があります。子供のために買ったものです。それには「お父さんやお母さんの習った『日本の建国』」という一つの章があり、昔の国史の国定教科書の最初の部分が収録されていました。それはこうなっています。「第一 天照大神（あまてらすおおみかみ） 天皇陛下のご先祖を天照大神と申し上げる。大神は、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）伊弉冉尊（いざなみのみこと）二柱の神が、天下（あめのした）の君としてお生みになった限りなくたふとい（尊い）神であらせられる。」そしてこの前にも書いた天孫降臨があり、「第二 神武天皇」へと進んでいきます。「ににぎのみこと（私のワープロソフトではこの漢字が出ません）から神武天皇に至るまでは、御代々日向（宮崎県）においでになって、わが国をお治めになった。けれども、東の方にはまだわるものが大勢いて、あたりをさわがせていた。神武天皇は、これらのわるものを平らげ、民を安んじて皇祖の大御心をお弘めになろうと、海路はるかに大和へ向かって御軍をお進めになった。」と、いわゆる神武天皇の東征について書いています。そして神武天皇が苦勞の末、皇居を橿原に建て、即位の礼を挙げた年を紀元元年としていると教科書には書いてあります。

この紀元は「皇紀」といわれ、今年が皇紀2,665年になります。私は昭和15年に皇紀2,600年の祝賀の催しが国を挙げてあったことも、その時の歌も、よく覚えています。その歌は「金鵝（きんし、金色のとび（鳶）のことです）輝く日本の、栄えある光身に受けて、今こそ祝えこの朝（あした）、紀元は二千六百年、ああ一億の胸は鳴る」というものです。これにはすぐに替え歌ができました。「『金鵝』上がって15銭、栄えある『光』30銭、今こそ上がるたばこの値、・・・」というたばこの値段が一斉に上げられたことを揶揄する歌です。

なぜこの歌の最初に金色の鳶が出てくるかというのと、神武天皇が大和へ攻め入るために苦戦している時、天皇の持っていた弓の先に金色の鳶がとまり、その輝く光に賊軍の目がくらんで、賊軍は敗退したという神話があるからです。

それでは三笠宮寛仁氏に移りましょう。11月4日の朝日新聞にはこの三笠宮が女系天皇に反論する文を自らが会長を務めている福祉団体の機関誌に載せていたことを報じています。朝日新聞の掲載したその文の要旨によると、三笠宮は上に述べた神話を史実とした日本歴史を信じているように見えるのです。この要旨によれば三笠宮の文にはこう書いてあります。「論点は二つです。一つは二六六五年間の世界に類を見ない我が国固有の歴史と伝統を平成の御代にいと簡単に変更して良いのかどうかです。万世一系、一二五代の

天子様の皇統が貴重な理由は、神話の時代の初代・神武天皇から連綿として一度の例外も無く、『男系』で今上陛下迄続いてきているという厳然たる事実です。」

「万世一系」という言葉が出てくると、私はぞっとしてしまいます。万世一系の天皇のために死ぬのが日本男児の生き方とされ、私自身その努力をした、60年以上前の日本を思い出すからです。またこの文には国民を表す「民草」という言葉も出てくるようです。氏はわれわれ国民を主権者ではなく、60年以上前の「民草」と見ているのでしょうか。

昭和天皇の末弟の三笠宮崇仁氏は優れたオリエント歴史学者で、天皇制に対しても歴史学者らしい鋭い意見を述べていました。その子息の寛仁氏が歴史と神話をごっちゃにした歴史観を持っているのが私には理解できません。

しかしこれは決して皇室や皇族が今もこのような歴史観を持っていることを示しているものではありません。私は対照的に現在の天皇が2001年12月18日に、68歳の誕生日を前にして行った記者会見での発言を思い出します。記者からはサッカーのワールドカップ日韓共催に関連して、韓国についての質問が出ました。その時天皇は次のように答えました。

「日本と韓国との人々の間には、古くから深い交流があったことは、日本書紀などに詳しく記されています。韓国から移住した人々や、招へいされた人々によって、様々な文化や技術が伝えられました。宮内庁楽部の楽師の中には、当時の移住者の子孫で、代々楽師を務め、今も折々に雅楽を演奏している人がいます。こうした文化や技術が、日本の人々の熱意と韓国の人々の友好的態度によって日本にもたらされたことは、幸いなことだったと思います。日本のその後の発展に、大きく寄与したこととと思っています。私自身としては、桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると、続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています。武寧王は日本との関係が深く、この時以来、日本に五経博士が代々招へいされるようになりました。また、武寧王の子、聖明王は、日本に仏教を伝えたことで知られております。

しかし、残念なことに、韓国との交流は、このような交流ばかりではありませんでした。このことを、私どもは忘れてはならないと思います。（これは植民地としての支配のことです）」

私はこの天皇の発言に感激しました。天皇には60年以上前の日本のあり方についての深い反省があるように思いました。万世一系の天皇家に韓国人の血が混じっているなどと60年以上前に言えば、その人は間違いなく不敬罪で直ちに逮捕されました。天皇のこの発言は、三笠宮の「二六六五年間の世界に類を見ない我が国固有の歴史と伝統」という考えとは違う歴史観に基づくものです。

「日本ヨイ国清イ国。世界ニーツノ神ノ国」という文が昔の修身の教科書に載っていました。日本は他の国より一段上の世界に類を見ない優れた国だ、という教育が行われていました。なぜ一段上の世界に類を見ない優れた国なのか。その理由は天照大神という神様の子孫が天皇家として、2600年にわたって連綿と支配していた神の国だからです。

皇統の中に韓国人の血が混じっているという天皇の発言には、このような誤ったナショナリズムを否定しようとする意図があったものと、私は受け止めました。とても勇気のある発言だったと思います。このような天皇の発言と対比した時、三笠宮の歴史観には暗然とせざるを得ません。（今思い出しましたが、森前首相も日本を「神の国」と言ってい

ましたね)

今回私は経営学者の視点から見た60年以前の日本という文を書こうと思っていました。しかし三笠宮の歴史観を知り、急遽内容を変えました。戦後60年をテーマにもう3回書きましたので、日野原さんの言う戦争を経験したものの責任はある程度は果たせたものと思います。次回は別のテーマに移ります。

日米開戦の日に、2つの宣戦の詔勅に見える国の自意識の変化を考える。

老年学士曜随想第28号 05年12月10日

一昨日は12月8日。私にとっては8月15日と同様、忘れ得ない日です。日野原さんが戦争を経験した者は、戦争を後の世代へ語り伝えるべきだ、と言っているのを受けて、今回も戦後60年記念の随想にさせていただきます。

1941年12月8日は太平洋戦争開戦の日で、この日天皇はアメリカとイギリスに対する宣戦の詔勅を出しました。国民(小)学校5年生だった私は、この詔勅を何度も読み、最初の部分は覚えました。当時は教育勅語なども覚えておく必要がありましたし、中学に入ってから、軍人勅諭も覚える努力をしました。どれもみな、なかなか調子のいい文ですから、声を出して唱えるのも楽しいことでした。

太平洋戦争の前に天皇が宣戦の詔勅を出したのは、その37年前の日露戦争の時です。国民学校の6年生の時に、日露戦争の宣戦の詔勅を見つけて、読みました。そして大発見をしました。

この二つの最初の部分を読み比べてみると、とても似た文の中に微妙な違いが二つあることを見つけました。しかし違いの理由は分かりませんでした。軽々しく人に聞けることでもありません。それ以来謎として私の頭に残っていました。

64年後の今、その違いの理由を考えてみたいと思います。なお二つの詔勅の最初の部分は、末尾に載せておきます。ご興味がある方はお読み下さい。共にインターネットから取ってきたものです。昭和の詔勅のこの部分は、私は今でも諳んじています。

私が気付いた二つの違いは次のようなものです。一つは日露戦争の詔勅では「大日本帝国天皇」ではなく、「大日本国皇帝」となっていることです。日露戦争当時、日本国内では「天皇」という呼び方がされていたはずですが、それなのになぜ「天皇」ではなく「皇帝」だったのか。

もう一つは日露戦争の詔勅にあった「国際条規の範囲に於いて」全力を尽くして戦え、というこの限定が、昭和の詔勅からはなくなっていることです。こうした二つの違いがなぜ起きたのか、それを今の私は次のように考えています。なお、日露戦争の10年前の日清戦争の宣戦の詔勅も「皇帝」であり、「国際法ニ悖(モト)ラサル限り」という一節が入っています。

なぜこの二つの違いが起きたのか。私の結論を先に言いますと、明治時代には、日本政府は日本が欧米諸国と同じ近代的な立憲君主国であることを世界に印象付けようとしたのではないのでしょうか。日本は欧米の国々より遅れた異質の野蛮国ではなく、全く同じように進んだ国なのだ、と知らせたかったのでしょう。その気持ちが昭和にはなくなり、逆に日本は欧米の国より一段と優れた世界で唯一の「現人神」が統治する国だ、と変わりました。この変化が宣戦布告の詔勅にも表れたのではないのでしょうか。

宣戦の詔勅は国民に対して出されたものです。決して相手国に対して出されたものではありません。しかしなぜ開戦するに至ったかの大义名分を述べているものですから、外国の目も意識したのではないのでしょうか。

「国際条規の範囲に於いて」という一節を入れたのは、日本は国際法規を遵守する、欧米諸国と同質の国であることを印象づけたかったのでしょう。そして事実、ロシア軍の捕虜の扱いにも、国際法規を遵守したと言われています。日露戦争の13年後の第一次大戦

のことで、ドイツ人の捕虜も国際法規に従って扱われ、彼らはオーケストラを編成することもできました。そして日本で最初にベートーベンの第9交響曲を演奏したことはよく知られています。そのような時代だったのです。

昭和の宣戦の詔勅を書く時、当然日露戦争の詔勅を参考にしたはずですが、だから非常に似た文になっているわけです。その時敢えて「国際条規の範囲に於いて」という一節を消してしまったのは、日本が外国の目を意識しなくなり、戦争に関する国際法規を無視することにした表れです。1932年3月に満州国を樹立し、その日本の行動を認めない国際連盟を翌年3月に脱退します。そんな流れの中で、外国より優れた日本、という意識が高まったのでしょ

う。だから軍人には国際法規を教えませんでした。戦陣訓で捕虜になることを禁じたのも、昭和に入ってからです。よく外国の戦争劇映画で、捕虜が捕虜としての権利を主張する場面を見ますが、日本の軍人はそんな知識を持っていませんでした。

こうした国際条規の無視が敵の捕虜の虐待につながり、戦後にB、C級戦犯を多く出す原因となりました。わずかに37年間の差ですが、ここにも明治の日本と昭和の日本との違いの一端が表れています。

このような流れで考えてみますと、天皇とせず、皇帝とした理由は次のように推測できるのではないのでしょうか。「天皇」を「皇帝」と称することで、日本の統治者はヨーロッパの国々にいる皇帝と同質の統治者なのだ、ヨーロッパと同質の国なのだ、ということを経験したからではないのでしょうか。日露戦争開戦の1904年には、ヨーロッパの国々にはフランスを除いてみな皇帝がいました。皇帝を戴く立憲君主国という政治体制がグローバル・スタンダードだったと言えるのではないのでしょうか。

日本もそのグローバル・スタンダードを採用している国である、という印象を与えるには、日本独自の「天皇」という呼称よりも「皇帝」という呼称の方が通りがいい、と考えたのではないのでしょうか。これは私の推測ですから、正しいかどうかは分かりませんが。しかしもしそうであれば、その後30数年の間に、日本の天皇は、どこの国にもいる普通の皇帝から、世界に唯一の、神の子孫の「現人神」になり、そして日本もその「現人神」が統治する神の国になってしまったのです。「日本ヨイ国、キヨイ国。世界デーツノ神ノ国」（修身の教科書）に変わってしまったのです。宣戦の詔勅が出てから64年目の12月8日にこんなことを考えました。

【参考】

1941年の太平洋戦争（当時日本は大東亜戦争と言いました）の宣戦の詔勅の最初の部分は次の通りです。（分かりやすいように解説が付いています）

「天佑（テンユウ、天の助け）ヲ保有シ、万世一系（バンセイイッケイ、永遠に一つの血統が続く）ノ皇祚（コウソ、天皇の位）ヲ踐（フ、行う）メル大日本帝国天皇ハ、昭（アキラカ）ニ忠誠勇武ナル汝有衆（ユウシュウ、国民）ニ示ス。

朕（チン、天皇の一人称）茲（ココ）ニ米國及英國ニ対シテ戦ヲ宣ス、朕カ（が）陸海將兵ハ全力ヲ奮（フルツ）テ交戦ニ従事シ、朕カ（が）百僚（ヒャクリョウ、多くの官吏）有司（ユウシ、つかさにある人達）ハ励精職務ヲ奉行（ホウコウ）シ、朕カ（が）衆庶（シ

ユウシヨ、庶民)ハ各々(オノオノ)其ノ本分ヲ尽シ、億兆一心国家ノ総力ヲ挙ケテ、征戦ノ目的ヲ達成スルニ違算ナカラムコトヲ期セヨ。」

1904年の日露戦争の宣戦の詔勅の上と同じ部分

「天佑を保有し万世一系の皇祚を踐める大日本国皇帝は忠実勇武なる汝有衆に示す。

朕茲に露国に対して戦を宣す。朕が陸海軍は宜く全力を極めて露国と交戦の事に従ふべく朕が百僚有司は宜く各々其の職務に率ひ其の権能に於て国家の目的を達するに努力すべし。凡そ国際条規の範囲に於て一切の手段を尽し違算なからむことを期せよ。」

3月10日は東京大空襲の日。飛行機の発達で戦争は民間人の大量殺戮となった。

老年学士曜随想第40号 06年3月11日

昨日は3月10日。この日は二つの点で私の記憶に留まっている日です。1906(明治39)年から1945(昭和20)年までの間、この日は陸軍記念日でした。今から101年前の1905年3月10日は、日露戦争の最中でした。日本陸軍は1905(明治38)年のこの日に、奉天会戦でロシア軍に勝利し、奉天(現在の瀋陽)を占領しました。翌年からこれを記念してこの日が「陸軍記念日」となりました。私は子どもの頃、大山巖総司令官が馬に乗って奉天に入城する絵をよく見ました。陸軍のこの勝利と、海軍の5月27日の日本海海戦における勝利で、日露戦争の帰趨は決まり、日本の勝利となりました。

奉天での勝利から40年後の1945年の3月10日は全く逆の記憶すべき日となりました。東京大空襲の日です。奉天会戦では、日本軍の損害は戦死者と負傷者とを合わせて7万人といわれています。それに対してこの日の東京大空襲では、死者は10万人を超え、負傷者は11万人といわれています。奉天会戦の犠牲者の3倍の民間人が、一晩のわずか3時間の空襲で出たのです。この犠牲者の数は広島原爆を上回る規模です。

1944年11月から始まったB29爆撃機による日本空襲は、最初は1万メートルを超す高空からの昼間の軍事施設の爆撃でした。しかし日本の防空能力などを考えて、その後攻撃方法を変更しました。無線による誘導で夜間に2千メートルほどの低空から、攻撃するようになりました。夜間の空襲ですから、目標を正確に狙って爆弾を落とすことはできません。つまり攻撃目標も変わったということです。軍事施設などを狙ったものから、都市の住民を狙ったものになったのです。大量の焼夷弾をばらまき、非戦闘員である都市住民を多数焼き殺すことにしたのです。こうした爆撃方法の最大のものが、325機といわれる多数のB29爆撃機が東京の下町を狙った3月10日の東京大空襲だったのです。

非戦闘員の大量殺害を狙ったこの爆撃は、明らかにジュネーブ条約違反です。ジュネーブ条約では戦争を軍隊同士の戦いと考えており、非戦闘員(文民)は保護されるべきものなのです。しかし飛行機の発達によって都市に対する無差別爆撃が始まりました。

無差別爆撃に対する抗議の気持ちを、ピカソはかの有名な「ゲルニカ」という作品で表しました。1937年4月26日、スペインのフランコ将軍の要請に応じたヒトラーの空軍が、ピカソの祖国であるスペインの小さな村、ゲルニカを爆撃しました。そしてわずか3時間の間に二千人も村人が殺害されました。村の人口の三分の一近い人々が殺されたのです。

この2年後の1939年から、日本の海軍航空部隊は当時の中華民国の首都、重慶の市街に対して無差別的な空襲を行いました。1940年には空爆の出撃回数182回、使用爆弾4,333トンに達しています。そして特に被害の大きかった1939年5月3日と4日の2日間の爆撃での死者は4,000人といわれています(佐々木隆爾編「昭和史の事典」)。

39年には当時の米大統領ルーズベルトは日本軍の重慶空爆を国際法違反として激しく攻撃しました。

ヨーロッパ戦線では、米英機による無差別爆撃として有名なのは、1945年2月13日に二度行われたドレスデンへの爆撃です。英空軍のランカスター爆撃機は午後10時過ぎにド

レスデンめがけて爆撃を開始しました。200 機を越す爆撃機から投下された焼夷弾は、瞬く間に街を焼き払いました。英空軍による攻撃はさらに3時間後の14日午前1時過ぎにも行われました。第一次攻撃の2倍以上の爆撃機がドレスデンを通常爆弾で攻撃しました。英空軍が攻撃を2回に分けた裏には冷酷な計算があったと言われていています。最初の攻撃によって火災を発生させることで人々は避難を始めたり、消火作業を開始するわけですが、その活動が最も活発になる頃に爆弾による攻撃を加えて、人々を殺そうとしたのです。この二度に亘る空襲でドレスデンの市民、35,000人が殺されました。

それから約一ヶ月後の3月10日に東京大空襲が行われたわけです。その死者は10万人と言われていていますから、これが人類が1日で行った最大の殺戮ということになるでしょう（広島原爆の死者は8万人との数字もありますので、そうだとすれば東京大空襲の方が死者が多いことになります。）。

私はこの1年前まで東京に住んでいましたが、その後朝鮮の平壤に移りましたので、この大空襲を経験していません。このように61年前には、戦争で1日に何万人という単位で人が殺されていたのです。

この東京大空襲を指揮したカーチス・ルメイ司令官は「もし、われわれが負けていたら、私は戦争犯罪人として裁かれていただろう。幸い、私は勝者の方に属していた」と言ったといわれています。

1992年、ドレスデン爆撃を指揮したアーサー・ハリス将軍の銅像がロンドンの中心部に建てられた際、ドイツ政府は強く抗議しました。ところが日本政府はそれとは反対に、日本に対する空襲で50万人もの日本人を殺したカーチス・ルメイ司令官に勲一等旭日大綬章を贈りました。航空自衛隊の育成に協力した、という理由です。